

絶対に、こんなことで死んでたまるか

たった二十秒の間で、神戸の町がなくなってしまった。自然の力の恐ろしさが、神戸市民そして世界中の人々に分かったと思う。その二十秒の地震のあと、僕たち一家四人が、崩れた家の中で五時間埋まっていた。三十センチの空間の中で声を出し合い、外の人の足音を聞けば、自分たちが埋まっていることを知らせた。外を通る人たちも、自分たちが逃げるのと恐怖で分かってくれない。十分、二十分、三十分、時がすぎる。かべのにおい、暗い中、口の中は土でつばも出なかった。母の大きな声が聞こえる。

「大丈夫、がんばろう。」

父は落ち着いていた。兄は父に、

「助かったら冷たいビールを思いっきり飲もう。おやじ、死ぬなよ！」

「おかん、がんばれ。良介もがんばれ。」

兄の力強い声は、僕に勇気を与えてくれた。

二時間ぐらい時間がたった。足の先から冷たくなり、頭の中が白くなってきた。それから数分たった。外の人が僕たちの声にやっと気づいてくれた。

「だいじょうぶか！」

兄が、

「僕たち四人がいます。助けてください。お願いします。」

「分かった！人を集めてくるから、もうすこしの間、がんばって！」

それから二十分おきくらいに声をかけてくれた。その時に父が、

「これから時間が長い、もう声を出さな、体力をたもて。」

今までで一番静かで冷静だった父が、力強い声で僕たちをばげましてくれた。

三時間がたった。父と母は、口に出さなかったけど、僕は火事になったらどうしようと考えた。

足から火がきたら、熱いし苦しいだろうと不安だった。

僕は百七十五センチ九十キロの体で、三十センチの空間はとても苦しかった。でも僕は、自分の心の中で、「絶対に、こんなことで死んでたまるか。」と自分の心に誓った。

それから近所のパン屋のお兄さんが、六人ぐらい若い人たちを連れてきてくれた。がれき、トタンや大きな柱などをどけて、ちょっとずつ家の中に入れてきてくれる間も、ずっと僕たち家族に声をかけてくれた。自分たちの家のこともあるのに、僕たちのために何時間もかけて救助してくれた。母が、小さな声で、

「ありがとう。」

と、つぶやいていた。

生活の中で、いろいろ便利な機械やコンピュータなどがあるけど、人が人のことを思う気持ちの方が、何よりも一番大切なことが、この大震災のおかげでわかった。

父と母が大切にしていた祖父の写真が、兄のそばに落ちていた。そして、埋もれて五時間ぐらいたって、とうとう兄が救出された。祖父が兄を守ってくれたと思った。あれほど、

「オレが助かったら、良介を出したるからな。」

と言っていた兄が、ぼうぜんとしていた。それから、父が助かり、母が助かって、僕も外に出られた。真っ暗の中で、砂とほこりの中にいたので、外のかかりを見たときと、空気を思いつきり吸えたときの感動は、だれにも分からないと思う。

僕たちを助けてくれた人たちは、僕たちが、「ありがとう。」の一言も言っていないうちに、自分たちの家のことで、もういなかった。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。